

保育者が問題にする「気になる子」 についての傾向分析

井 口 均

An Analysis about the Preschool Children's Behaviors Which is Thought a Problem From the Child Care Person

Hitoshi INOKUCHI

はじめに

子どもをどのように受け入れるか、その具体的なあり様が教育においては実践の角度をもたらししていく。そのセンスが問われる一つの状況が子どもの問題に出会った時であり、どのような事柄にどう対応しているかである。子どもの捉え方や子どもを受け入れる基本的方向性をそこに見い出すことができるからである。保育の中で、思い通りに行動しない子どもに対して「どうしたの?」と問いかけるという対応でも、「面白くないの」と探りをる場合は子どもの外面的行動を手がかりにして内面を理解しようとする姿勢を感じとることができる。しかしもう一方で、「どうしてそんなことをするの」とか、「いつも日頃から注意しているのにどうして言うことを聞かないの」という、非難を込めて叱る場合もある。後者が頻繁になれば、子どもは自分が受け入れられていないことを感じとる。幼ければ幼い程、子どもは言語的情報以上に相手の感情的情報を読み取っていくからである。

保育の中で「気になる子」がいると保育者としては確かに落ち着かないものである。その感じ方には、一方で、手のかかる子どもだけだと受け入れつつも、今一つ自分の中で理解しきれないもどかしさから生じる感覚がある。他方で、聞き分けのない厄介者に本音としては関わりたくないが、立場上切り捨てる訳にもいかないイライラから生じる感覚もある。保育者と子どもの関係をどうサポートしていくかを考えた場合、「『がんばれ』保育」⁽¹⁾の克服という問題だけでなく、最近の子どもたちに見られる「新しい荒れ」⁽²⁾予備群への対応上の苦慮に対する具体的サポートを検討する必要がある。保育において問題になる「気になる」子の実態を保育者自身がどのように捉えているのか、それが1つの手がかりになるのではなかろうか。

1. 今回の目的

保育者にとって「気になる子」とはどのような子どもを指すのであろうか。その後の成長や発達を気づかったり、自分の意図する保育や指導にとって不都合であったり、援助の

具体的方法を見い出せなかったり、いろんな問題がそれには絡んでいる。

今回の目的の第1は、「気になる子」の存在に関する保育者の意識を検討することである。第2に、「気になる子」について何が気になるのか、保育者が問題にする具体的事柄を明らかにし、その内容傾向を明らかにすることである。

個々の保育者の意見をできるだけ反映させるために、質問の単一化と回答を自由記述式にする方法をとった。自由記述によって、保育者の感じている気になる行動が具体的に表現されることを期待し、自由記述式がもつ煩雑さのデメリットを少なくするため質問を絞り込んで1問のみとした。但し、今回はその具体的内容の検討まで行なう枚数上の余裕がないことを予め断っておかねばならない。

2. 方 法

(1) 対 象

現在、年少、年中、年長クラス及び混合クラス（縦割り）の担任を対象者とした。複数による担任の場合、補助者は対象から除外した。

(2) アンケート内容

調査用紙は無記名とし、担当クラス、性別、保育歴（調査年度で）等についての簡単なフェイス調査項目欄を作成した。

質問は、「あなたのクラスに、発達上『気になるな!』『心配だな!』と感じる子どもさんは居ますか」という問いのみ。「居る」と答えた保育者にその子の月齢と性別を記入した上で、「気になる」内容を具体的に記述してもらった。1人について最大120字の記入欄を設定した。また、10人分の記入欄を作成したので、1人について記入欄が足りなければ別の欄も利用できるようにした。

(3) 配付先の選定

アンケート調査票の配付先の選定は、対象地域を市部、郡部(南部、北部)、離島の3つに区分し、各地域にある全園数に対する比例抽出を無作為に行なった。市部のサンプル数が極端に多くなることを避けるため、各地域の幼稚園と保育所ごとに抽出比例値を25%(市部)、35%(郡部)、40%(離島)と変化させ、1園(所)に3通(年少、年中、年長担任)の調査票をそれぞれ郵送した。表-1は地域別の各園(所)への配付数と回収率をまとめたものである。無作為抽出の対象となった具体的地名は以下の通りである。

市部：長崎、諫早、大村、島原、佐世保の5市。

郡部：南部地域—飯盛、小長井、高来、森山、香焼、三和、野母崎、吾妻、愛野、有明、有家、小浜、加津佐、北有馬、口之津、国見、千々石、西有家、布津、深江、瑞穂、南有馬、南串山の23町。

北部地域—宇久、江迎、小値賀、小佐々、佐々、鹿町、世知原、田平、福島、大瀬戸、西海、崎戸、西彼、外海、川棚、波佐見の16町。

離島：伊王島、高島、松島、大島、富江、三井楽、玉之浦、岐宿、奈留、若松、奈良尾、上五島、有川、新魚目、石田、芦辺、郷ノ浦、勝本、美津島、豊玉、峰、上県、

上対馬の23町。

発送は1998年10月8日に行ない、返送締切り日を同年10月23日必着とした（離島のみ27日）。調査票の回収は全て郵送により行ない、切手付返信用封筒の同封や、回収率を高めるためのボールペン謹呈、最低1回の電話催促等を園（所）レベルで実施した。

3. 結果及び考察

集計結果から得られた傾向は以下の通りである。

(1) 回収率

回収率は離島・幼稚園以外の全ての地域で50%を大幅に下回り、これまで実施した調査回収実績（過去5年で約70%）と比較すると半分程度の低い数値の地域もあった。原因として、数件の問い合わせから推測できることとして、園（所）での恒例行事の準備期間と調査期間がぶつかったケースが少なからずあったこと等が考えられる。

表-1. アンケート調査票の配付数及び回収率

地域	幼保	配布数	回収数	回収率%
市部	幼	195	73	37.4
	保	276	132	47.8
郡部	幼	72	30	41.7
	保	225	98	43.6
離島	幼	51	31	60.8
	保	120	43	35.8
計		939	407	43.3

(2) 回答した保育者の保育経験年数

回答して下さった保育者の保育経験年数は、現在1年目の新任保育者から34年目の経験豊富なベテランまで幅広く分布している。図-1は保育経験年数を3区分（5年未満、5～9年、10年以上）した場合、各年数に分類される保育者の人数分布（比率）を示したもので、10年以上の保育経験をもつ保育者の占める比率が最も多く、5～9年、5年未満の順となった。

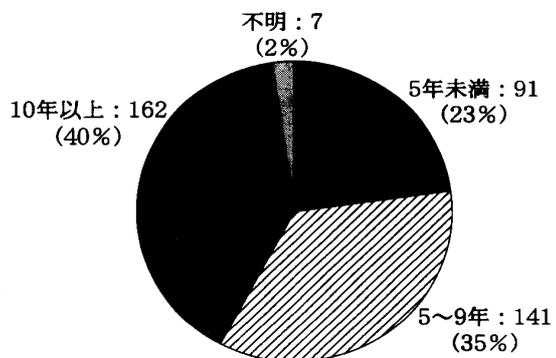


図-1. 保育経験年数別に区分した保育者の占める人数（比率）

(3) 「気になる子」の有無に関する傾向

今回のアンケートで問うた「気になる子」の有無について、全保育者（407名）の回答をみると、無回答の6名を除いた場合、「居る」と回答したのは212人（53%）で、「居ない」と回答したのは189人（47%）であった。「居ない」と回答した保育者がどのような意味や理由から「居ない」と判断したのであろうか。推測の域を出ないが、特定の何人かを挙げて云々することが問題児としてのレッテル張りにつながることを危惧した可能性もある。

そこで、「居る」「居ない」の回答傾向をいくつかの属性、条件別にみたのが以下の7項目である。

①保育経験年数別にみた回答状況

「気になる子」の有無に対する回答を保育経験年数別（不明者13名除く）に集計したのが図-2である。5～9年経験者で「居る」の回答比率が、僅かではあるが3区分中で最も高い53.9%になっている。しかし、他の経験年数と比較して顕著な違いとまでは言い切れない。

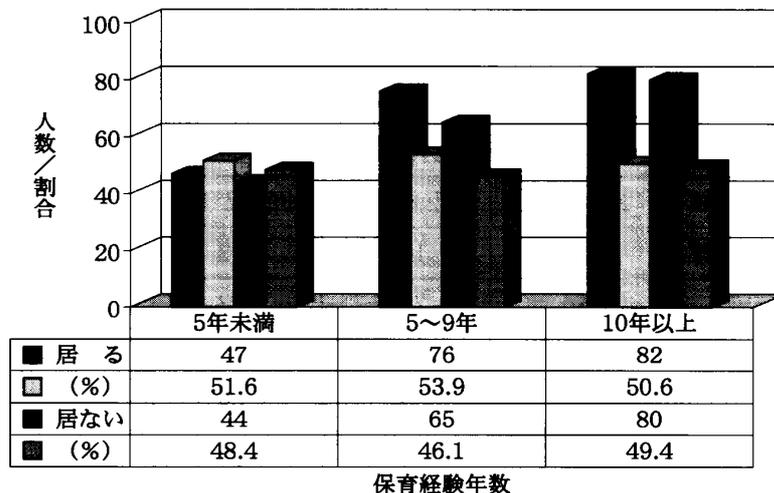


図-2. 保育経験別-「気になる子」の有無に対する保育者回答の人数/比率

②幼稚園と保育所での回答状況

更に幼稚園と保育所別に集計したのが図-3、図-4である。どちらも半数以上の保育者が「居る」と回答している。幼稚園の方が「居る」の回答比率が僅かではあるが高くなっている。保育所の場合はほぼ半々と言える。

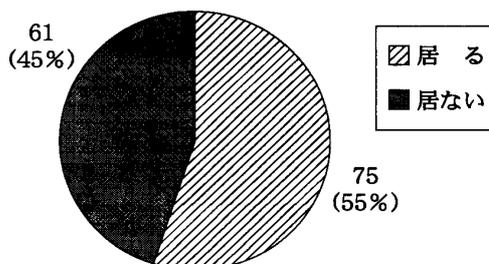


図-3. 幼稚園-「気になる子」の有無に対する保育者の比率

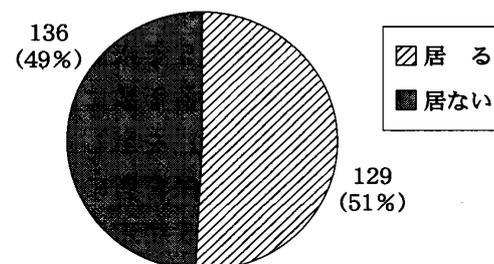


図-4. 保育所-「気になる子」の有無に対する保育者の比率

③地域別にみた回答状況

地域別に集計したのが図-5である。これによると、市部と郡部・離島との間に多少の違いが見られる。「居る」回答の比率が最も高いのは群部で、市部が最も低くなっている。

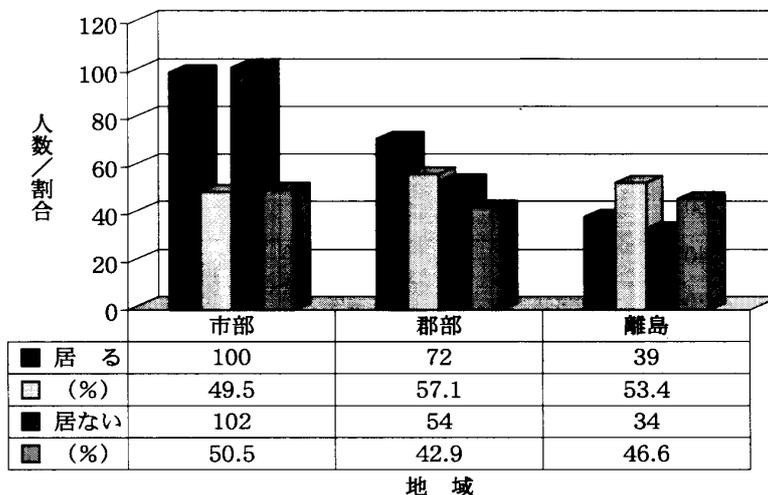


図-5. 地域別-「気になる子」の有無に対する保育者回答の人数/比率

④クラス別にみた回答状況

クラス別に集計したのが図-6である。年少・年長クラスと年中クラスの間で僅かながら違いが見られる。年少と年長クラスで「居る」回答が5割を超えて高くなっており、ほぼ同程度となっている。また、混合クラスもそれと同じ比率となった。年中クラスが最も低く、45.5%であった。

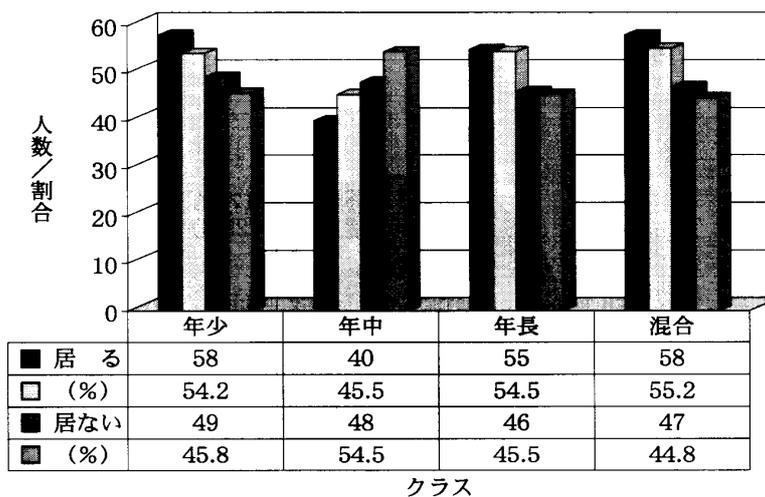


図-6. クラス別-「気になる子」の有無に対する保育者回答の人数/比率

⑤クラス規模別にみた回答状況

クラス規模別に集計したものが図-7である。クラス規模が大きくなる程、「居る」回答

の比率が高くなる傾向が顕著である。20人未満の場合、「居る」と回答した保育者の比率は44.7%と「居ない」の55.3%より少なくなっている。しかし、20～29人から30人以上へとクラス規模が大きくなるに従って、「居る」回答の比率は60%から67.3%へと明らかに高くなっているのである。クラス規模と「気になる子」との間に何らかの関係があると考えられる。

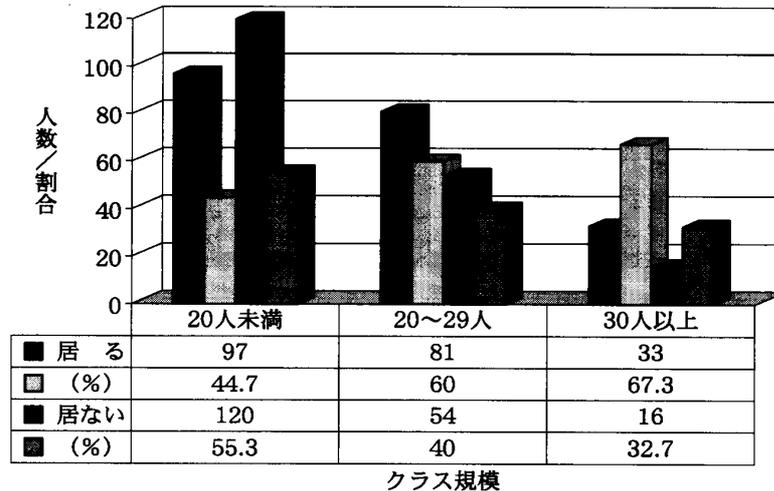


図-7. クラス規模-「気になる子」の有無に対する保育者回答の人数/比率

⑥ 「気になる子」として挙げられた子どもの年齢分布

保育者が「気になる子」として挙げた年少から年長クラスの子どもについて、月齢の月数を省略して年齢別に分布を調べたのが図-8である。6歳児の比率が非常に少ないのは、6歳になっている子ども的人数自体がまだ少ないので当然のことと言える。4歳児が36%と最も多く、あと5歳、3歳の順になっているがそれ程際立った差異とは言えない。先の図-6の結果と考えあわせると、少なくとも年少クラスの比率の高さは、年少児クラスの4歳児が影響を与えていると考えられる。

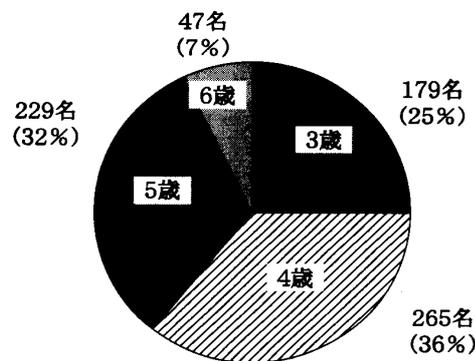


図-8. 「気になる子」として記述された子どもの年齢分布

⑦ 幼稚園、保育所別に見た「気になる子」の年齢分布

「気になる子」について、幼稚園と保育所に分類したのが図-9である。「気になる子」の

実数は保育所児の方が多く、幼稚園児の2倍以上となっているが、回収されたアンケート数が約2倍であることを考えれば当然の結果と言える。年齢分布をみると、幼稚園と保育所でちょっとした違った傾向が見られる。つまり、幼稚園児では5歳児の比率が最も高く44%に達し、3歳、4歳、5歳の年齢順に次第に高くなる傾向を示している。それに対し、保育所児は4歳児の39%が最も多く、3歳、5歳児がほぼ同じ比率で並んでいる。単純にみれば、幼稚園では加齢に伴って「気になる子」が増え、保育所では4歳児にピークがあると言える。見る（評価する）側である保育者の評価基準等が必ずしも一致してないので、その現象がどのような理由によるものか不明である。

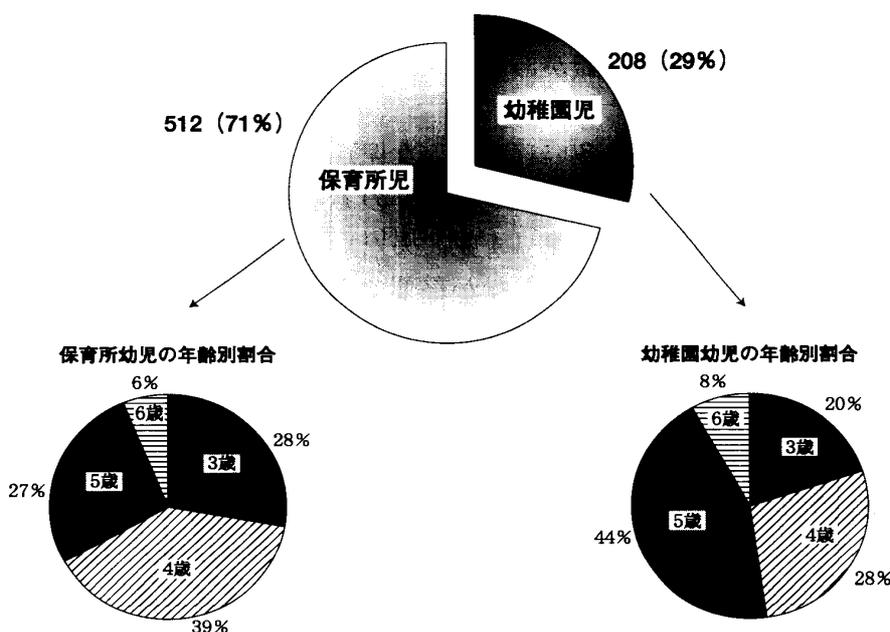


図-9. 園（所）別に見た「気になる子」の年齢分布

以上の「気になる子」の有無についての回答状況から明らかになったこととして、いくつかの事柄を指摘することができる。第1は、保育者の経験年数や幼・保の違いは「気になる子」の有無の比率に顕著な差異をもたらさなかったと指摘できる。第2に、差異が比較的に見られたのは地域間で、市部より郡部の方が「居る」と回答した幼・保の保育者の比率が高かった。また第3に、クラス間でも多少の差異が見られ、年中クラスで「居る」と回答した保育者の比率が多少低くなった。第4に、比較的顕著な傾向として、クラス規模が大きくなる程「気になる子」が「居る」と回答する保育者の比率が高くなることを指摘できる。最後に、第5として、「気になる子」の年齢比率が幼稚園と保育所で異なり、比較的顕著な違いが見られた。その点で、幼稚園の年齢別人数分布や5歳児の「気になる子」に関する記述を少し検討する必要があるだろう。

(4) 「気になる子」の行動内容とその分布状況に関する傾向

① 「気になる子」についての記述内容の分類（カテゴリ化）

ここでは「気になる子」が「居る」と回答した保育者の記述内容に基づき、「気になる子」

の行動内容を検討した。保育者の記述内容を整理した結果、次の8つのカテゴリに分類できた。それは基本的な生活習慣（身辺処理）に関するもの（1 X）、言葉に関するもの（2 X）、こだわり行動（固執性）に関するもの（3 X）、情緒的不安に関するもの（4 X）、身体運動・操作力に関するもの（5 X）、集団行動に関するもの（6 X）、不活発・無気力に関するもの（70）、分類が困難なもの（80）の8つである。

各カテゴリについて3つの事例を挙げておくが、それらは保育者の記述内容を損なわないように簡潔に表現し直したものである。

[基本的な生活習慣（身辺処理）に関するもの（1 X）]

- ・食事、着替え等を殆ど自分でしようとししない（3歳、男児）
- ・ふざけて食べるが多く、咽に引っ掛けてもどすこともある（4歳、女児）
- ・排泄（大便）に対して苦手意識があるのか、漏らすことが多い（5歳、男児）

[言葉に関するもの（2 X）]

- ・オウム返しの言葉が目立って多い（3歳、女児）
- ・単語は聞き取れる程度に話せるが、つながりのある話しになると何を話しているのか聞き取れないほど、発音が不明瞭（4歳、男児）
- ・発表や一対一で大人と話すと時、なかなか言葉で表現しようとししない（5歳、女児）

[こだわり（固執）行動に関するもの（3 X）]

- ・注意するとやめるが、チンチンをよくさわる（3歳、男児）
- ・1つのもの（トラックやタイヤ）に固執し、他に興味が広がらない（4歳、男児）
- ・いつも指しゃぶりばかりをしていて、行動が幼い（5歳、女児）

[情緒的不安に関するもの（4 X）]

- ・何でもないことに泣いたり、お昼寝も泣いてすぐ起きたり、担任が自分の側からいなくなるとすぐ泣く（3歳、女児）
- ・落ちつきがなく、静かに集中したり、じっと座っていることができない（4歳、男児）
- ・保育者や大人（特に男の人）に注意されるとすぐ泣き、長泣きである（5歳、男児）

[身体運動・操作力に関するもの（5 X）]

- ・手先に力が入らないようで、牛乳パックも開けられない（3歳、男児）
- ・原因は大体分かっていますが（ほとんど車で移動する）、両足跳びができない。また、ピョンピョン跳ぶ時に床から足がなかなか離れない（4歳、女児）
- ・背筋力がなく、姿勢がすぐ崩れやすい（5歳、女児）

[集団生活行動に関するもの（6 X）]

- ・集団の中では行儀も良く、礼儀も正しくて教師から見ればやりやすい子ども。反面気になる。「自分」をもっと集団の中で出せるようになって欲しい（3歳、女児）
- ・自分がリードできる子どもとしか遊ばないようで、機嫌を損ねたりすると乱暴な行動にはしったりすることが多い（4歳、男児）
- ・集団の一員としての約束事が守れず、勝手な行動をいつもとっている。話を聞く事ができないし、自分の所持品の始末も全くしようとししない（5歳、男児）

[不活発・無気力に関するもの（70）]

- ・身の回りのことをするのに言葉かけや援助がないとできないことが多い。家ではほとんど母親にしてもらっている様子（3歳、男児）

- ・次の行動に移る時、ほとんど周りの子供たちがやり終えたところからやっと始めるといった感じで取りかかりが遅い。促してもあまり効果がなくだいたい一緒にしてあげる（4歳、女兒）
- ・1人っ子の為か自分から何もしようとしない。いつもお弁当箱が残っていたりカードが残っていたりする（5歳、女兒）

[分類が困難なもの (80)]

- ・行きたい所へ行き、やりたいことをして大の字に倒れたり、頭を床に打ちつけて泣く（3歳、女兒）
- ・制作活動などの仕上がりはとても早い、とても雑。乱暴的な所があり、虫などを捕らえても扱いが荒く、カタツムリがつぶれるくらい握りしめたり、ものに対する独占欲が強い（4歳、女兒）
- ・話すことが非現実的で、テレビ、ビデオの見過ぎだと思われる（5歳、男児）

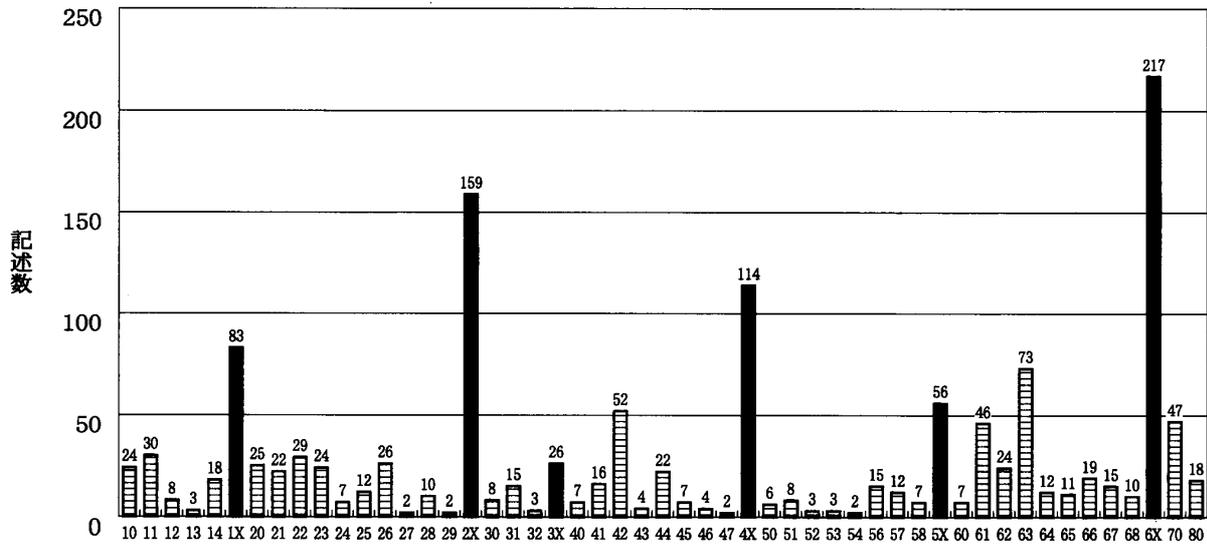
また、各カテゴリ内で共通した気になる個別の行動内容を共通なもの同士をグループ化することで、カテゴリ内をいくつかの下位行動項目にまとめた。それを各カテゴリ別にみたのが次の表-2である。保育者の記述内容を反映させるために専門用語にはこだわらず、記述の中にあるキーワードをできるだけ用いた。

表-2. 各カテゴリ及び下位行動項目

1 X		2 X		3 X		4 X		5 X		6 X	
下位行動項目	表示										
排泄行動	10	一方向的言葉	20	口唇刺激	30	場所見知り	40	基本動作力	50	自他未分化	60
食事行動	11	自発発話	21	特定対象物	31	すぐ泣き	41	不安定歩行	51	暴力的解決	61
衣服着脱	12	言語不明瞭	22	身体いじり	32	注意散漫	42	動作姿勢	52	集団参加	62
就寝行動	13	言葉理解	23			無表情	43	視力	53	関係づくり	63
生活習慣全般	14	伝達表現	24			立ち直り	44	体力	54	相互交渉	64
		会話	25			過敏的	45			視線	65
		聞き取り	26			パニック	46	手指操作	56	母子分離	66
		吃音	27			強い不安感	47	マヒ・障害	57	ふざけ	67
		乱暴言葉	28					アレルギー等	58	顔色伺い	68
		早熟言葉	29								

②記述に示されたカテゴリ別行動及びカテゴリ内下位行動項目の分布

保育者の記述内容から整理した8つのカテゴリと表-2に分類した下位行動項目を集計したのが図-10である。集団生活行動に関するカテゴリ・6 Xに分類される記述が最も多く、言葉に関するカテゴリ・2 X、情緒的不安に関するカテゴリ・4 X、基本的生活習慣(身辺処理)に関するカテゴリ・1 X、身体運動・操作力に関するカテゴリ・5 X、こだわり(固執)行動に関するカテゴリ・3 Xの順となっている。下位行動項目のみで見た場合、集団行動に関するカテゴリ・6 Xの「関係づくり」(63)が最も多く、情緒的不安に関するカテゴリ・4 Xの「注意散漫」(42)、集団生活行動に関するカテゴリ・6 Xの「暴力的解決」(61)が上位3項目となっている。



各カテゴリ及び気になる行動項目

図-10. カテゴリ別行動及びカテゴリ内下位行動項目の記述分布

③地域別傾向

カテゴリ別記述数の分布を地域別に見たのが図-11である。市部、郡部、離島共にカテゴリ・6 X、カテゴリ・2 X、カテゴリ・4 Xが同順で上位3カテゴリとなっている。これは図-12を見ても明らかのように、記述数の比率でも3地域の傾向は非常に類似している。その意味で、集団生活行動、言葉、情緒的不安に関するカテゴリは、地域に関係なく保育者に共通する「気になる子」の主要な内容となっていると指摘できる。

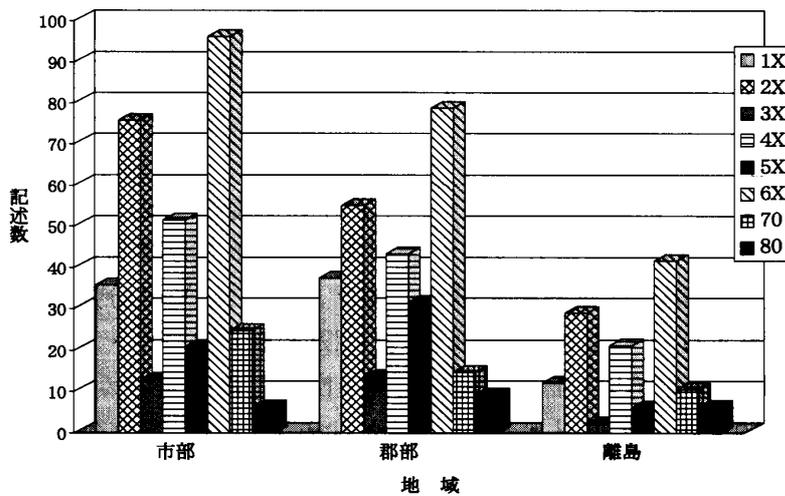


図-11. カテゴリ別記述数の地域別分布

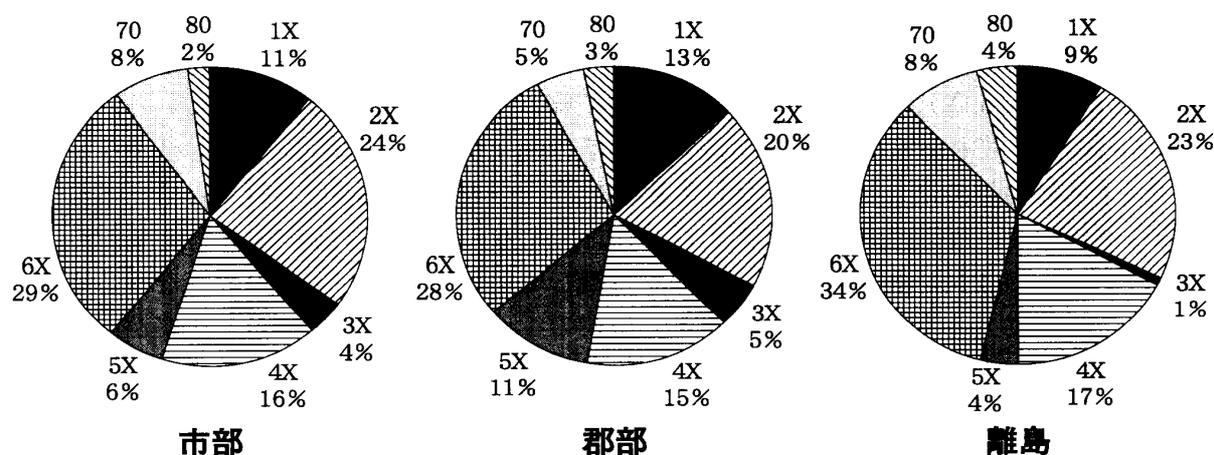


図-12. 地域別に見たカテゴリ別記述数の比率

④幼稚園、保育所別傾向

もし集団生活行動、言葉、情緒的不安に関するカテゴリが保育者に共通する子どもの気になる現象だとすれば、幼稚園、保育所でも共通したカテゴリ分布が「気になる子」に見い出されてもよいはずである。つまり、カテゴリ・6 X、カテゴリ・2 X、カテゴリ・4 X が幼・保においてほぼ同比率で見い出されるということである。図-13はそのことを裏付けている。幼稚園と保育所のカテゴリ・6 X は34.6%と27.9%，カテゴリ・2 X は22.1%と21.7%，カテゴリ・4 X は18.3%と16.6% となっており、幼稚園の方が各カテゴリで多少高い比率を示しているが、幼・保共に類似した分布となっている。

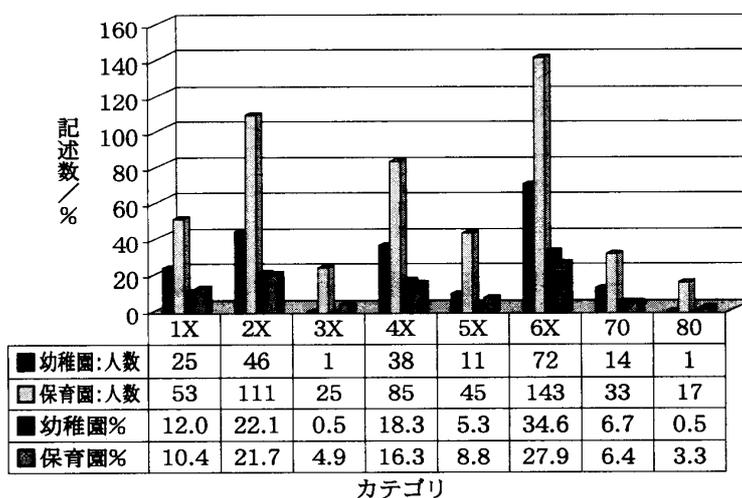


図-13. 園（所）別に見たカテゴリ記述数の比率

⑤保育者の保育経験年数とカテゴリ分布

それでは集団生活行動（6 X）、言葉（2 X）、情緒的不安（4 X）の分布傾向は、保育経験年数によって変化するのであろうか。図-14は「気になる子」が「居る」と回答した保育者212人について、3年または6年間ごとに保育経験年数を区切り、各経験年数にあてはま

る保育者の記述内容に占める各カテゴリの比率を示したものである。

横断的資料であるだけにその変化のもつ意味を推測することは困難だが、ある範囲内で集団生活行動（6 X）、言葉（2 X）、情緒的不安（4 X）の比率は変動している。他のカテゴリとの比較で相対化して見ると、集団生活行動（6 X）、言葉（2 X）の2カテゴリは4～24年目にかけて常に上位1，2位の高い比率を一貫して維持していると言える。経験年数に関係なく、保育者はこの2カテゴリを「気になる子」の主な内容と考えており、その後の子どもの成長や発達を考える際にも重視していると考えてよいのではなかろうか。

集団生活行動（6 X）についてみると、最初の1～3年目から36.9%と比率が高く、4～6年目でピークをつくり、その後10～12年目まで低下現象を示す。その後は上下動を多少繰り返すが大きな落ち込みは見られない。

言葉（2 X）は、25年目以降は別にして、全体として上下動を繰り返すが、10～12年目の27.4%を上限にしながら変動の範囲も10%以内で収まっており、比較的安定した比率を維持している。

情緒的不安（4 X）は、10～12年目と19～24年目でそれぞれ12.0%と9.5%という落ち込みを見せる以外は、20%近い比率を一応維持している。但し、4～24年目の範囲で集団生活行動（6 X）、言葉（2 X）とこのカテゴリの比率を比較した場合、その2カテゴリを超えることは一度もない。

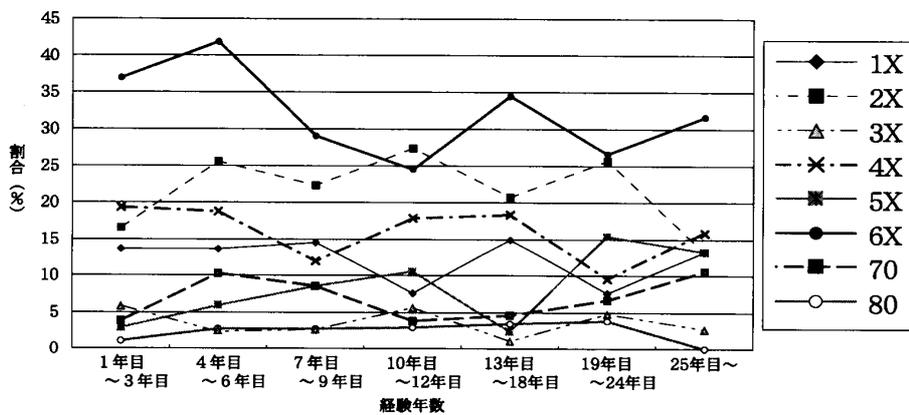


図-14. 保育経験年数と各カテゴリの比率

(5) 「気になる子」の年齢分布に見られた幼・保間での違いに関する検討

既に指摘したように、幼稚園と保育所とでは「気になる子」の年齢別比率に多少目立った違いが見られた。この違いがどこから生じているかを改めて検討する必要がある。集計結果が示すように、保育者が挙げた「気になる子」の内容は、居住地域、勤務機関（施設）、保育経験年数等の違いがあるにもかかわらず、集団生活行動（6 X）、言葉（2 X）の2カテゴリが主要なものであった。だとすれば、「気になる子」についての幼・保間での違いは子どもの側にある何らかの問題に起因しているのであろうか。

そこで、幼稚園と保育所で生じたその違いを検討するために、子どもの性別や年齢別の人数分布についての検討を行なった。

①幼稚園、保育所の「気になる子」の性別と年齢比較

図-9で示したように、幼稚園5歳児は「気になる子」として挙げられた子どもの年齢分布において、最も高い44%に達した。それに対し、保育所児は4歳児の39%がもっとも高い数値であった。この幼稚園5歳児の高い数値は何に起因していたのか。まず性別区分によって、幼・保5歳児両者間にある違いを検討した。園（所）別に年齢を区分し、各年齢ごとに男女児の人数を整理したのが表-3であるが、明らかに人数の片寄りがみられる。表-3及び図-15（表-3の人数比率をグラフにしたもの）からも明らかのように、幼稚園5歳児における「気になる子」の比率の高さは、より多くの5歳男児が保育者によって「気になる子」として挙げられた結果生じたものと考えられる。

表-3. 園（所）別に年齢ごとの性別幼児数

	幼／男児	幼／女児	保／男児	保／女児
3 歳	20	22	91	46
4 歳	33	27	126	79
5 歳	69	21	93	46
6 歳	13	4	20	10

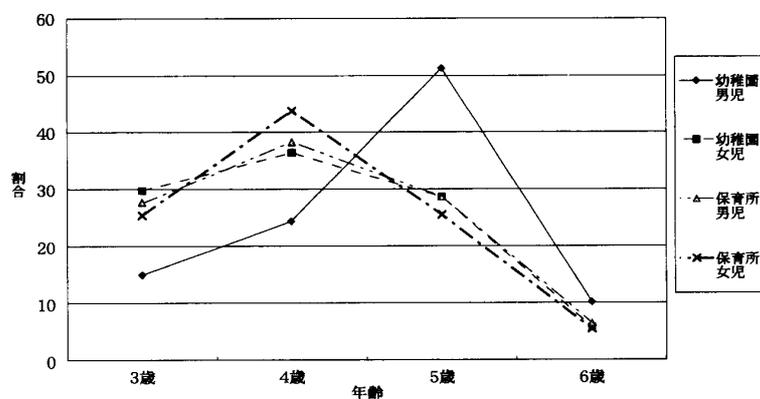


図-15. 各年齢における園（所）・性別ごとの幼児の比率

更に、各カテゴリに占める比率を園（所）と年齢別に示したのが図-16である。これには、幼稚園5歳児のカテゴリ分布の特徴が示されている。最も高い数値を示したのが集団生活行動（6 X）で43.3%であった。言葉（2 X）が次に続くが、他の同年齢児の比率とも比較的近い数値となっており、ここで唯一特徴的と言えるのは集団生活行動（6 X）の突出である。幼稚園5歳男児のカテゴリ分布を保育所5歳男児と比較したのが図-17であるが、このことから、幼稚園5歳児の問題は男児を中心とした集団生活行動にあると言える。

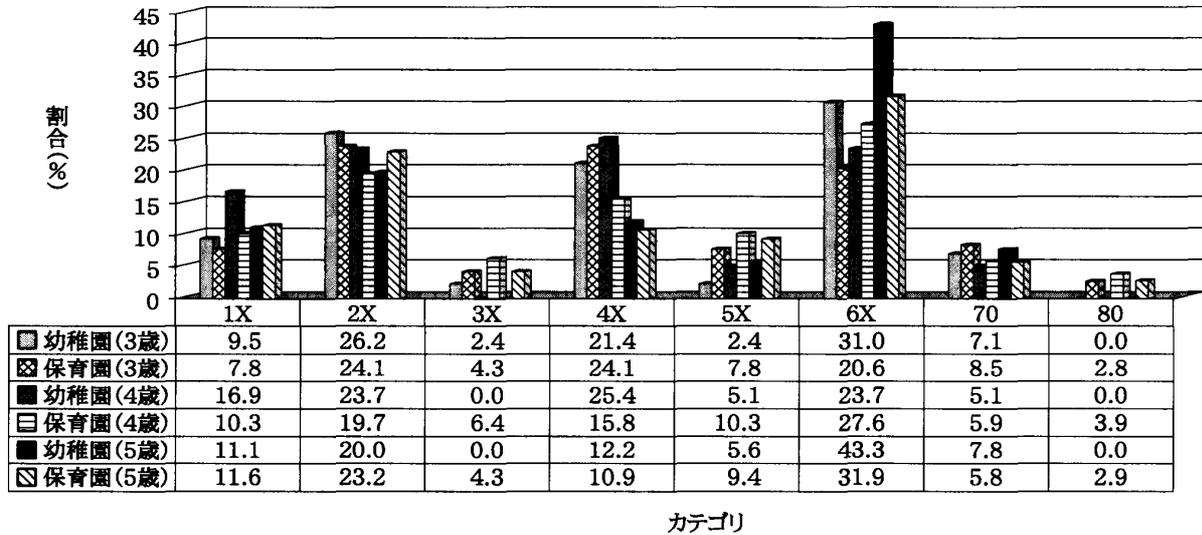


図-16. 各カテゴリにおける園(所)・年齢別ごとの幼児の比率

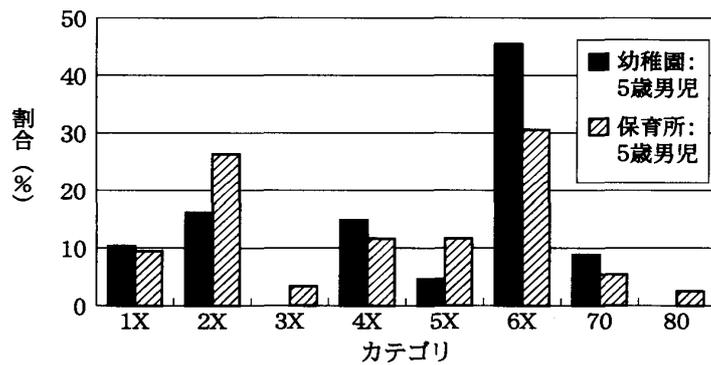


図-17. 各カテゴリにおける園(所)・年齢別ごとの幼児の比率

②幼稚園5歳男児の集団生活行動に関する気になる内容

特徴的であった幼稚園5歳男児の集団生活行動について検討するため、保育者から指摘された全内容を要約して次に挙げる。果たして、これらの記述内容に幼稚園5歳児が高い比率で挙げられなければならない必然性を見出すことができるであろうか。結論から言えば否定的である。

[保育者の記述内容の要約]

- ・人の靴に入っている光る電池を盗んだり、乱暴な行動をとる。

- ・友達と一緒に遊んでいても、すぐ手が出て困る。
- ・暴力を相手に振るうことが多い。
- ・自分の思い通りにならないと泣いたり、相手をつかんだり、物を投げたりする。
- ・気に入らないことがあると、思わず手や足が出て暴力に訴える。
- ・急にわけもなく特定の子をまるで虫かなにかのように蹴ったり、叩いたり、倒れると踏みつけて泣かしてしまう。

- ・自分の思い通りにならないと、友達に乱暴したり大声を出したりする。
- ・感情が抑えられず、遊びや遊具の面でのトラブルが起こりやすい。
- ・特定の男児に競争意識が強い。また自分の欲求のままに力づくで処理する。

-
- ・クラスの中には入ってくるが、みんなと一緒にすることができない。
 - ・集団生活での約束事が守れず、勝手な行動をいつもとる。(話をきちんと聞く。自分の所持品の始末をする。等)
 - ・お友達と仲良く遊ぶわりに、ちょっとしたことですぐ泣いて関係がつくれない。
 - ・遊びの中で「入れて」「貸して」がうまく言えず、関係がつくれないことが多い。
 - ・順番を待つ、我慢する、物の貸し借りなどができない。
 - ・友達と一緒に考えを出し合って遊ぶことが少ない。文字や数字に強く、驚くほど。
 - ・リーダー的存在で、周りの子に命令口調だったり、仲よし以外は仲間に入れない。

-
- ・集団への意識や協調性が乏しい。
 - ・途中入園のためか、お友達となかなか遊べず、また遊びを知らない。
 - ・集団より1人でいることを好み、他人にはどうしたらよいか分からない様子。
 - ・年長より転入。近所に年下の子しかいないため、同年齢の仲良しの友達が作れない。
 - ・友達の中に自分から入ろうとせず、とにかくうまく遊べない。
 - ・同年齢と一緒に遊べず、また遊びに誘っても入ろうとしない。

-
- ・一度伝えたことをすぐ忘れる。
 - ・注意を受けてもすぐ忘れて同じことを繰り返す。
 - ・注意をして分かったと返事をするが、すぐまた同じことをする。
 - ・何度か繰り返し注意したことをすぐ忘れ、また同じことをする。
 - ・保育者と視線が合わず、キョロキョロ。絵本などもいつも違うところを見ている。
 - ・教師が仲間を集めて、支えないと関われない。

-
- ・困ったことがあると自分で言えず人に頼ろうとしたり、すぐ泣く。
 - ・教師の手を借りたがり、自分の力でやろうとしない。
 - ・ふざけることが多い。

-
- ・自分に自信がなさそうで、いつも大人や教師の目を意識してびくびくしている。
 - ・教師の言葉をすぐく気にし、何でもすぐ人のせいにする。

以上を保育所の記述内容と比較したが殆ど違いがみられなかった。性別や年齢を分けて比較するまでには至らなかったが、図-18にあるように集団生活行動に関する下位行動項目の分布について幼・保を比較した場合でも殆ど違いは見られない。そうしたことから、今回の幼稚園5歳男児の比率の高さは、幼稚園の5歳男児のみに特有な問題が発生していたと結論づけることはできない。今回の資料から理由づけるのは困難と思われる。

しかし、具体的記述に見られる現象が5歳児においても出現する頻度が高いということ

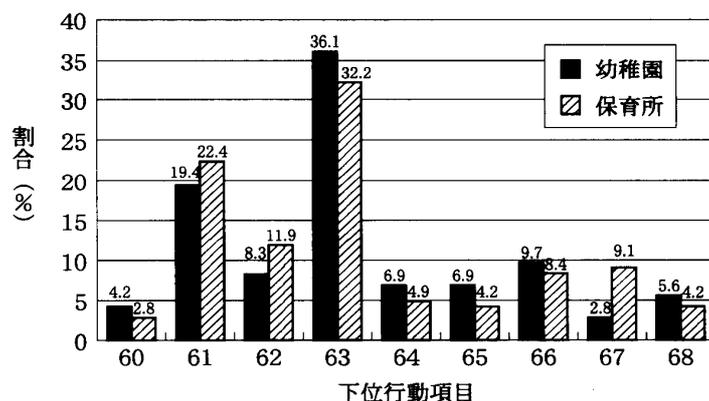


図-18. 各カテゴリにおける園（所）・年齢別ごとの幼児の比率

は今後更に検討すべき課題と思われる。各記述内容を見れば分かるように、他児のものを勝手にくすめる子、思い通りにならないと我慢ができない子、クラスの約束を守らない子、先生が話す時や注意を集中して聞けず、忘れてしまう子、安易に他人を頼ってしまい自分でやろうとしない子、自信をもてずに意欲的に取り組もうとしない子、等々のイメージを読みとることができる。こうした幼稚園5歳児の姿が単に偶然生じたものではないとすれば、極めて深刻な問題と指摘しなければならない。

おわりに

今回、県内の幼稚園と保育所で年少、年中、年長クラスの担任をしている保育者を対象にして行なったアンケート調査をまとめた。

主な目的は、「気になる子」を見る保育者側の具体的視点とその内容についての資料を得ることであった。

調査は、保育者が日頃実感している「気になる子」の有無についての判断と「気になる子」についての具体的記述を求めた。

有無回答の比率に関しては、保育者の経験年数や幼・保の違いがなく、地域間及びクラス間で多少の差異が見られた。比較的顕著な差異が見られたのはクラス規模間の差異で、規模が大きくなる程「居る」と回答する保育者の比率が高まる傾向を示した。また、年齢間の比率が幼稚園と保育所で異なった傾向が見られた。

記述内容に関しては、子どもが評価されたカテゴリの中で、集団生活行動(6 X)、言葉(2 X)、情緒的不安(4 X)の占める比重が大きいことも明らかになった。

その他、「気になる子」の年齢分布で見られた幼・保間での差異については説得性のある理由を今回の調査資料から見出すことはできなかった。

主に数量的な処理を中心に検討を行なったが、「気になる子」が「居る」と感じている保育者の記述内容をカテゴリ全体を検討することにより、その内容面での傾向をより具体的に分析する必要がある。

- (1) 渡邊保博「『がんばれ』保育への問い」現代と保育, 42号, 59-72, ひとなる書房, 1997年
- (2) 村山士郎「『新しい荒れ』をどう見るか」村山士郎「むかつく子ども荒れる学校」6-37, 桐書房, 1998年